

あいせき

## ウォークラリーの感想

10N1011 磯部隆博 出口ゼミ

私たちちは御茶ノ水駅に集合し、その後2つのグループに分かれて行動しました。私たちのグループはまず、ニコライ堂に行きました。ニコライ堂の中は天井が高く、ドーム型でした。ニコライ堂の中にいると、とても静かなので、心が落ち着く気がしました。ニコライ堂は日本で初めてにして最大級の本格的なビサンティン様式の教会建築といわれているので、そのような素晴らしい建築物を見て本当によかったです。次に神田Mビルを見ました。神田Mビル即物的な半透明のスクリーンをつくりたいという主旨よりされたらしく、特に夕刻にはコンクリートの素材感次第に消失し、アルミパネルとガラス部分んお織りなす三角形のパターンのみが浮上し始め、希薄な皮膜のスクリーンを感じさせるとOBの岡崎さんから配布してもらった資料に書いてあったので、今度時間があるときには、夕刻のときに神田Mビルに行き、スクリーンみたいになっている瞬間をデジカメで写真に収めたいと思いました。その次はお茶の水スクエアを見ました。TAのひとの話によるとお茶の水スクエアは近代と過去の様式が融合した建築物ということでした。まだ、様式については、まだ分からないので、もっと勉強したあとにまた来てみたいと思いました。また、OBの岡崎さんの話によると、奥の建物と手前の建物の壁の色は違う見えるけど、実際の壁の色自体は同じ色だということ聞きとても驚きました。その次は、南洋堂に行きました。南洋堂は建築専門店だということを知らなかったので、建築専門店の場所を知れて良かったです。南洋堂の外壁の表面は道路のコンクリートとの一体感をだすように作られていると聞き、確かにこの建物だけはこの近くの他の建物と違い、道路に近い感じになっていると思いました。最後に東京国立近代美術館で「建築はどこにあるの?」という展覧会を見ました。初めて、建築の展覧会を見たので、とても感激しました。特に屋根の部分が波のようにうねっていて、止まっているんだけど、流れを感じさせるようになっていてすごいと思いました。ウォークラリー全体を通して感じたことは、とてもみじかなところにも学ぶところがたくさんあるということです。OBの岡崎さんの話を聞くと、普段何気なく見ている町をこのように見ることが出来るのかと感心することが多かったので、時間があるときには、もっと注意深くみじかなところを見ていくこうと思いました。特に地形や建ぺい率の制限に関するこにに関して注目していきたいです。本当に今回のウォークラリーで貴重な体験が出来て良かったと思います。

車入セミ 1ホート

16N/10/12 出口ゲート 伊藤元氣

僕たちのリハーサルは、御苦心と神田、周辺を見て歩きました。僕はセミの後ろに、ゲートの代表として、感想を述べました。歌と内容が似てしまふかもしれません。體の流れだったことは自負しております。つまり、重音終了と自己譲り人間がいる、これがあります。それは「單なる歌」でなく、歌の周りの物語や音楽性を感じさせます。今日は、時間の関係上、歌詞の解説はござりません。理由は、歌詞はソロ、僕の性格のため、残り時間が少ないので、歌詞と譜面、車内ごとに書いておこうと思います。かのと、「特に」印像に残ったところ、主張しておきたいところ（「迷へる」が二度ある）、僕の歌詞を、これから4回目くらいまで歌う場合、歌詞不足です。）

〈神田ビル〉設計者：鈴木 豊雄 教授 1957(1)年3月  
現在ではよく見かけるようになつたデザインですが、竣工は1957年、20年以上前に建設されたとこで豪華でした。今は古い、当時：ひまわり連続は日本文化の一大の文化遺産ですか？ 現在：建築は三角形と正方形を組み合っており、黄色い壁面は三角形と正方形を組み合っており、屋根が興味深い形になります。美しい率がどうか、かのと、三角形が理想的に並び、それをうまくもじりました。

〈トランマ〉設計者：堀川辰三 完工：1969年 6月

ヤントラヨークが豪華な羽根模様になります。自然と建築が合います。  
特徴的（例えは、ドーム部分は人間の頭の骨の形がそれをいいます）  
です。複数の羽がまとめてあります。そして窓がたくさんあります。複数の羽がまとめてあります。

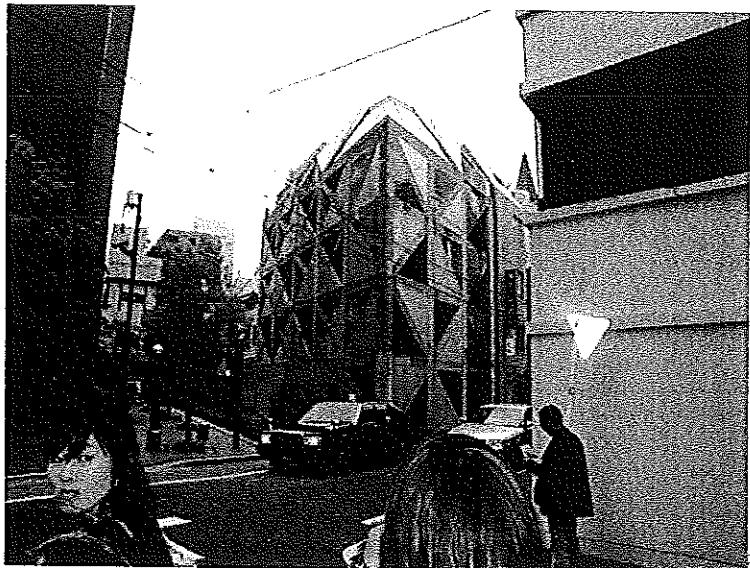
〈お寺の水谷口〉 1951年9月  
落成したようだ。壁は土壁、瓦葺き。奥の建物は昔の古民家  
か、前面に構造が似てゐる（？）。門には唐門、奥の門には  
前門の跡物と見て内伏するもので、是非見て下さい。  
（？）やはり延喜式の跡かといふと、それであります。

### 〈宝殿〉

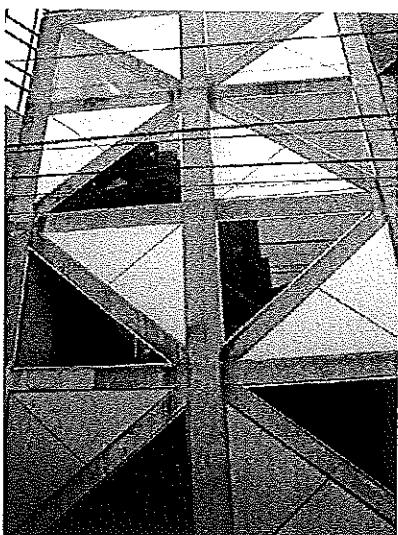
周囲は石垣で、正面は玄関として西側の正面（？）、そこは屏風と  
壓勝（？）で、静かで神妙な雰囲気をもつて、正面、西側、東側  
とも、正面の築、正面、長い廊裏（？）をして、  
左側が木の松の厚生材（？）と入り口と从士、正面の外  
側、正面の外側から正面の外側へ、正面を外へ、大人  
達の精神的影響をもつた。  
内部は外人が多く、紹介などではやはり新鮮な印象  
をもつて、方、方の壁が2つある壁、長い廊は壁をもつて、  
手を伸びて伸びて、もう少し長いです、です。

入セミナー ウクライナート

10/4 10/3 伊藤 智



神田 M ビル

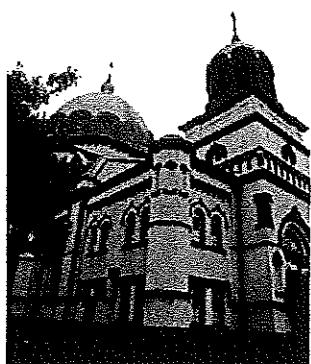


コンクリートの三角のフレームで構成されたオフ

イスビルです。 三角部分にはガラスとアルミパネルで仕上っています。1階部分の店舗（オフィス？）もブレースの入った三角の壁になっており、このパネルのふさぎ方は目隠しの役目をしている感じがしました。

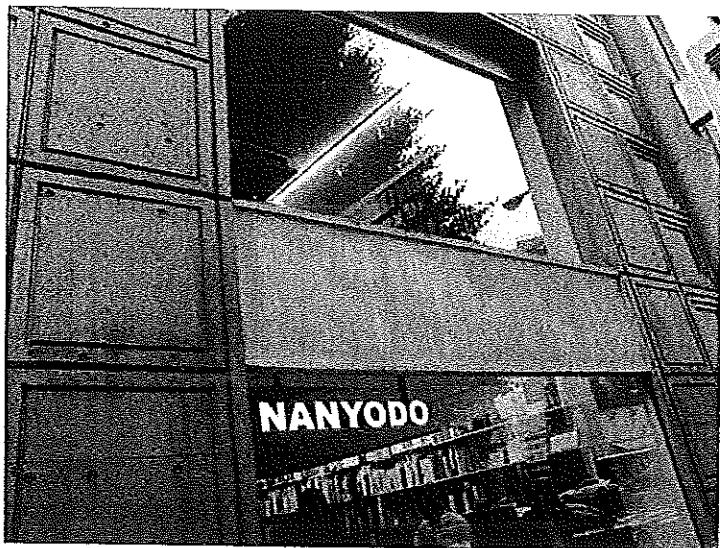


ニコライ堂

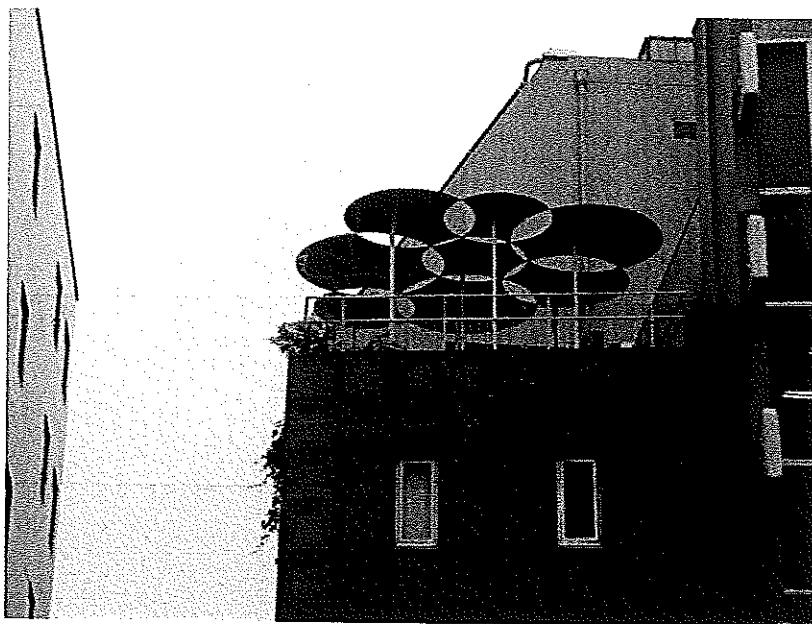


東京都千代田区神田駿河台にある正教会の大聖堂である。イエス・ハリストスの復活を記憶する大聖堂であり、正式名称は「東京復活大聖堂」。「ニコライ堂」は別名であり、日本に正教会の教えをもたらしたロシア人修道司祭(のち大主教)聖ニコライにちなむ。

建築面積は約800平方メートル、緑青を纏った高さ35メートルのドーム屋根が特徴であり[2]日本で初めてにして最大級の本格的なビザンティン様式の教会建築といわれる。1891年に竣工し、駿河台の高台に位置したため御茶ノ水界隈の景観に重要な位置を占めた。関東大震災で大きな被害を受けた後、一部構成の変更と修復を経て現在に至る。1962年6月21日、国的重要文化財に指定された]。



南洋堂





建築専

門書店とうたって 50 年。初代はい

ろいろいろなジャンルを扱っていたが、先代の二代目からは建築一筋できた。コンクリート打ちっぱなしの店舗は、1980（昭和 55）年竣工。筑波総合体育館、パキスタン最高裁判所などを手がけた土岐新の設計だ。

屋上にある赤く見えるのは実は赤い色をしているのではなくステンレスで赤い地面を反射することによって赤く見える。

### 感想

教授が言っていたように実際に建築を直で見ないとわからないことが多いというのは本当だったと実感するウォークラリーだった。ニコライ堂が十字架の形をしているのも実際行って確かめることによっていんじょうに残ってた気がする。また TA や OB の方々の説明のおかげで建築のいろいろな話がきけて楽しかった。

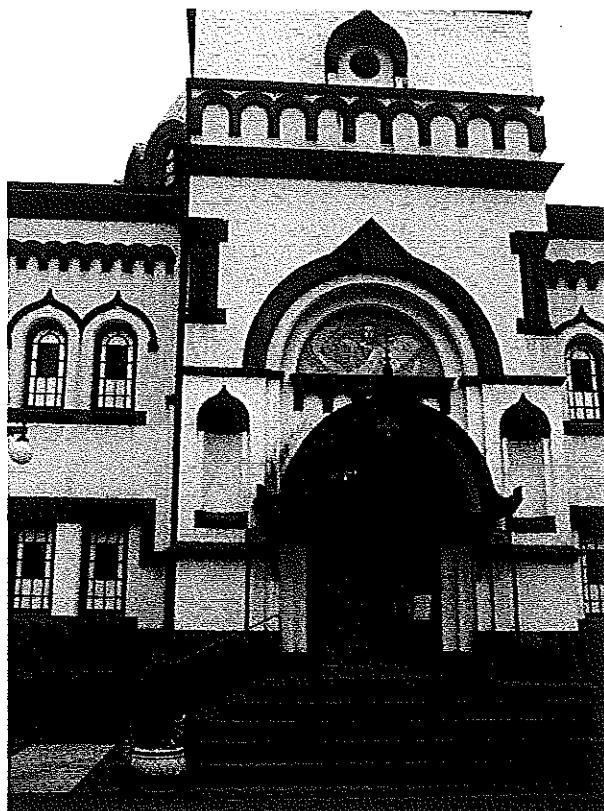
10N1014 稲垣聰子

### ウォークラリーレポート

5月29日に御茶ノ水駅から出発しました。OBの岡崎さん、TAや先輩方と一緒に、出口グループを4つの班に分けてそのうちの2つのグループごとに行動しました。

## お茶の水周辺

ニコライ堂



御茶ノ水駅の裏側（ビルが立ち並んでいない側）に行くとすぐにありました。設計者は有名なジョサイア・コンドルだと知りました。

内部も礼拝堂の前部はロープが張られていて立ち入り禁止で、パンフレットに載っていたちょっと変わったロシアンクロスは見つかりませんでした。説明してくれたおじさんによると、正面に「最後の晩餐」の絵が隠されているとのこと。いまいちよく見えませんでした。壁には聖人たちの肖像画（イコン）は飾られていて、壁の木の縁にも細かい彫刻がありました。

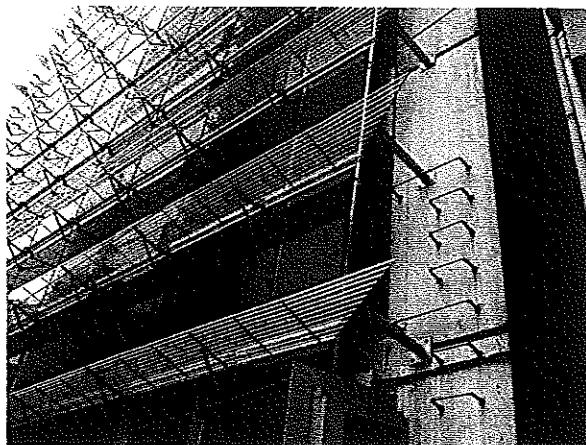
## 神田周辺

### 神田Mビル

街並みにあって最初は気付かませんでした。最初に貰ったパンフレットの写真は上からだったので、実際に見てみると、イメージと違いました。コンクリート打ちつけ。ガラス張りで、晴れている中だとガラスに反射して光がもろに照り返ってきてあつかつたです。

大通りに面していないので建物のそばから見上げることしかできず屋根は見えませんでした。

### メトロツアー



ガラス一枚一枚大きさが違い、メンテナンスやガラス掃除のために窓の縁にキャットウォークという金属の柵がありました。

一階はカフェテリアという、建物でした。

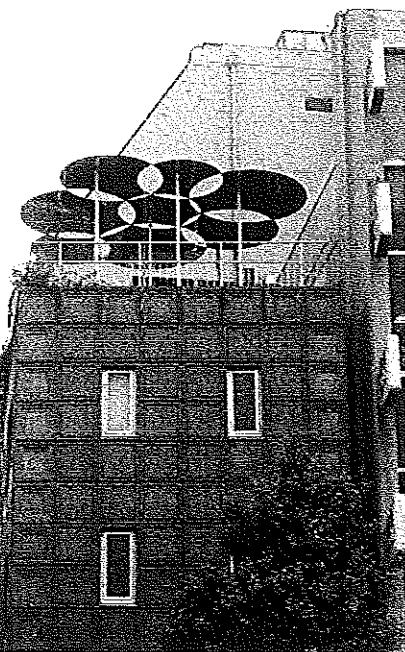
### お茶の水スクエア



日本大学の校舎。壁には石に彫刻がありました。レモンホールが近くにあってやっていた展示会を見たかったです。

## 銀座周辺

### 南洋堂



屋上にある円をデザインした金属の板が特徴的な建物。

### 皇居やその周辺

皇居は緑が多く車の騒音からも遮断された所でした。松や石垣などが邸内に調整され舞台のセットのようでした。皇居内にある三の丸尚蔵館も派手でなく周りの和の風景に溶け込んでいました。

また皇居の周りには、気象庁や毎日新聞社の本館など有名建築がありました。

### 東京国立近代美術館

最後に行った建物。中で行っていた美術展ではデザインスタジオの授業で教わっている中村先生の作品もありました。

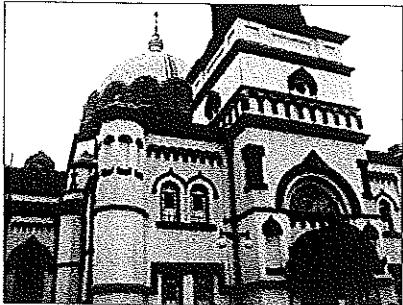
今回見た建物は美術館や観光地のようなものではない建物ではないもありました。メトロツアーハウスは窓の大きさが違っていることなど知らずに通る通行人のほうが多いと思う。身近な場所に転がっているもので、それは大部分の人が知らずにいる縁の下の力持ちのようなものが建築なのかと思いました。

# ウォークラリーの感想

出口導入ゼミ 10N1015 稲山由夏

私たち出口先生の導入ゼミでは、2班に分かれて御茶ノ水周辺を見学した。私たちの班で見学したそれぞれの場所について、感想を述べたいと思う。

## ① ニコライ堂

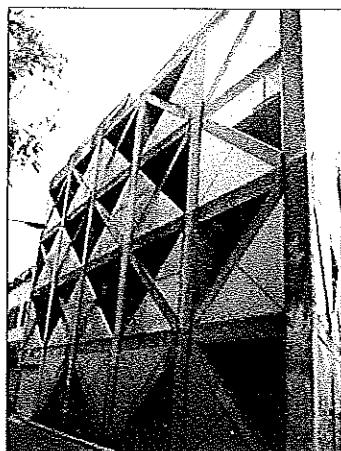


建物についての知識は全くと言っていいほどない私が、この建物は以前に何かで見たことがあった。思っていたより都会にあったので驚いた。外から見ただけでいかにも教会、日本のお茶の水という名前から想像する景色からはかけ離れた雰囲気を持っている。しかし建物の中は、外見よりももっと現実離れした、私にとっては完全な非日常だった。天井が

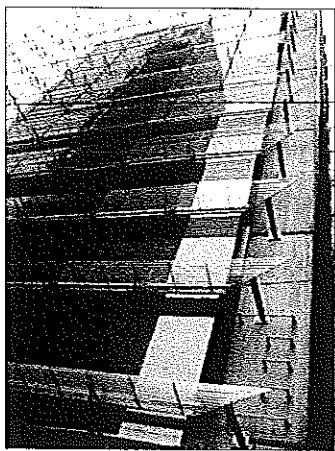
高く、その天井は半球形である。各所に設えられたステンドグラスや蠟燭、中に入るとまず目に入る大きなシャンデリアなど、日本の一般的な建物ではあまり見ないそういう物も雰囲気を演出している。私自身は日本の宗教に関する無頓着さは好きだが、その思想からはこの建物は生まれないだろうな、と感じた。

## ② 神田 Mビル

非常に現代的で、無機的な雰囲気を持った建物だな、とまず感じた。次に、建物の中から外を見てみたいと思った。ところどころに開いた三角形の窓から、中の階段が見える様が非常に綺麗だった。外壁はコンクリートそのままで、その無機質さに磨きをかけている。直線的で幾何学的なデザインかと思いきや、天井は、直線から成ってはいるものの丸みを感じさせるようなデザインで意外性を感じさせた。自分と比べるのもうかと思うが、私だったら天井は平らにしただろうなと思って、格の違いを実感させられた。



### ③ メトロツアー

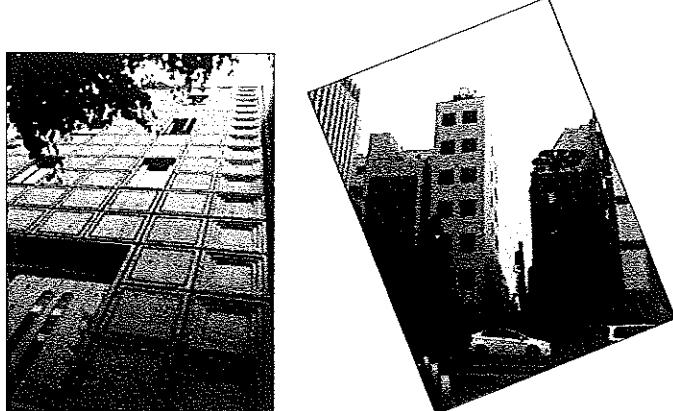


とても自然に周囲に馴染んでいて、パンフレットで見ていたのに目の前に立つまで気づかなかった。しかしいざ目の前に立ってみると、今まで目に入らなかったのが信じられないぐらいに独特な建物である。全面ガラス張りだが、周りの風景を反射しているのか建物全体が赤く光って見えて、温かみも感じさせる。キャットウォークは「昆虫の羽根をイメージして造られた」などとサラリと言うが、まず昆虫の羽根をイメージして建物を造るということも、そして昆虫の羽根をイメージしてなぜこのデザインになるのかも、もう何もかもが私の理解の範疇を超えていた。

### ④ お茶の水スクエア

日本大学お茶の水キャンパスの一部のようである。実際は違うのだが、最初に建物を建てて、後に増設したように見える。最初に建てたように見える部分は、いかにも昔に建てたといった雰囲気の、洋風の建物である。その上には、現代風のビルのような建物が乗っかっている（ように見える）。正直、説明を受けなから増設したようにしか見えない。なぜこんなデザインにしたのか、本当のところは分からぬが、とにかく面白い建物だと感じた。

### ⑤ 南洋堂



建築関係の本専門の本屋さんということで、これから先に私もきっとお世話になるのだろう。ここも神田Mビルと同じくコンクリートむき出しの外壁で、正方形の模様は周囲の道路と馴染むようにという意図だそうだ。中に入って見学することはできなかつたが、窓から中を見た感じ中の造りも吹き抜けのようになつていて面白かつた。これから先いざれと言わず、特に用事もないが早く中に入ってみたいと感じさせる建物だった。

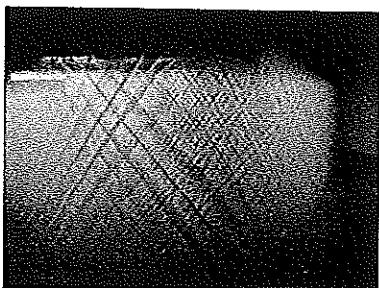
## ⑥ 三の丸尚蔵館



皇居の中にある、小さな博物館といった感じの建物である。まず、皇居の敷地内にも初めて入った私は、何よりもその静けさに驚かされた。敷地を出ればすぐ目の前には大きくて交通量の多い道路があるというのに、車が通っている音など全く聞こえない。鳥の鳴き声すらも

時々かすかに聞こえる程度だ。敷地内には広大な林が深く茂って、都心のとはまず思えない風景が広がっている。三の丸尚蔵館には、全く詳しくないのでよくは分からなかつたが、いかにも貴重そうな展示品が揃っていた。

## ⑦ 東京国立近代博物館

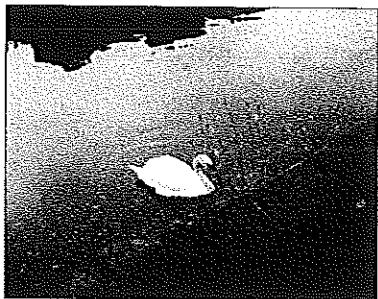


確か以前にも1度来たことがあったが、今回は企画展の「建築はどこにあるの？」を見学した。タイトル通り、7人の建築家の作品を見ていると、「建築はどこにあるの？」と考えざるを得ない。展示場に入ると、まず目に入るのは中村竜治先生の作品。紙でできた三角形を組み合わせて作った、「何か」というわけではないがとにかく存在感のある作品である。入っていきなりこの作品を見せられて、とにかく建築というものが一筋縄で見つかるものではないということは理解した。

その他には空間に突然置いてある扉、天井から赤いレーザーの光が降り注ぐ部屋、様々な多面体で構成された部屋などが展示されていた。私が特に気に入ったのは多面体の部屋である。特に一番最後に展示されていた空中都市のような建築は、実現されたら本当に心躍る建物である。建築≠居住空間であり、例えば美術館だと、そういった建築があることはもちろん理屈で分かってはいたが、意外と改めて考えないと気付かないことである。この企画展では、そういった、枠におさまらない建築家の情熱みたいなものを強く感じた。



## まとめ



私たちのグループは結構な距離を歩いて移動したように思う。東京にいると、大体は電車で目的地まで移動してしまうが、降りる駅によって雰囲気が違うことを私は当たり前のように受け取っていた。しかし、歩いて移動すると、風景が変わる瞬間が分かる。これは、実際に経験してみないと本当の意味で理解することはできないことだと思う。

そのことが学べたのは、私にとって大きな収穫だったと思う。

ところで私は自他共に認める出不精である。休日は電車に乗って出かけるどころか、最寄り駅周辺まで買い物に行くのがさえ珍しい。建築学科に入学して、いろんな先生方の話を聞くうちに「こんなに引きこもりではいけない」と思ってはいるのだが、さすがに長年の性格はそう簡単には変わらない。何が言いたいかというと、このウォークラリーという機会を与えてもらって本当に心の底からありがたいということだ。

出口先生、OB の岡崎さん、TA のみなさん、貴重な体験をありがとうございました！

# ウォークラリーの感想

10n1016 井野隼人

私の所属する出口ゼミはお茶の水駅に集合し、御茶ノ水・神田・内堀周辺の「まち」を見て歩きました。今回のウォークラリーは大学の周辺でしたが、身近にこんな建築や風景があったなんてと感心しました。特にニコライ堂・南洋堂・国立近代美術館は歩いたコースの中でとても印象深い建物でした。

ニコライ堂にはOBの岡崎さんと一緒に見て回りました。特徴は緑青をまとったドームであり、これは中から見るとふちの部分が見えなくなっていて中からでも天井を見れば空が見えると錯覚させるためにこのような作りになっていました。日本では最初にして最大級の本格的なビザンティン様式建築の教会であるらしいですが、関東大震災で崩壊し復興した形が現在のニコライ堂なので、中の柱やステンドガラスはとても新しく見えました。

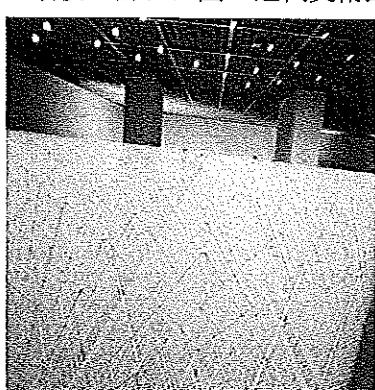


南洋堂は私が想像していた建物とは180度違って、一番びっくりさせられました。特に外観がもっと大きくて目立つデザインだと思っていましたが、小さくて正方形基調でまとまっていました。しかし、一階部分はガラスで中が丸見えでとても面白い作りだと思いました。



ただ、中は想像通りガラス越しですが建築専門書しかない感じでした。早く知識を身につけてこのお店にお世話になれるよう頑張りたいと思いました。

最後に訪れた国立近代美術館は、この美術館自体がすごく変わった形でいてとても落ちついた感じがすごいと感じました。この日は企画展ギャラリーが催されていて、中でも、一番目立ってるんじやと私が勝手に思ったのが法政のデザインスタジオお教えている中村先生の「どうもろこし畠」でした。一番最初ということもありましたが、圧倒的な存在感と一つ一つの正確さが織り交ざってすごいと感じました。また、床に近い部分はちゃんと紙の棒が厚くなっていて、建築の構造としても見られて勉強になりました。



これ以外にも、神田のMビルや、リバティータワー、昭和館などいろいろな建物を見て回ってとても有意義な時間でした。特にOBの岡崎さんには何気ない坂道だったり、道のわきに咲いてる花の種類だったり、ちょっとしたマークにも本当の意味が隠されているな

ど、見どころはいっぱいある、つまりもっと視野と感性を広く深く持とうと教えていただきました。今回参加なされてた3・4年生のように私もまたウォークラリーに参加したいと思いました。

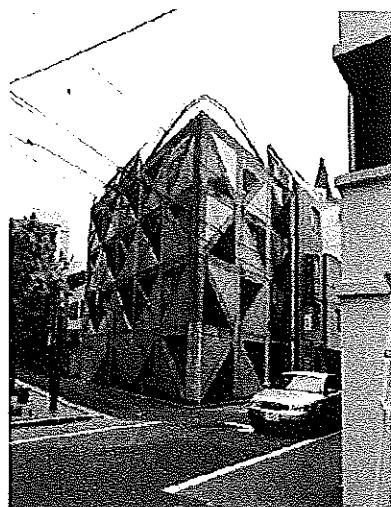
## 「ウォークラリーの感想」

10N1017 植草理香子 出口清孝ゼミ

○見学した建物：神田Mビル、ニコライ堂、お茶の水スクエア、南洋堂、昭和館、東京国立近代美術館(建物はどこにあるの?)

○感想

### 神田Mビル

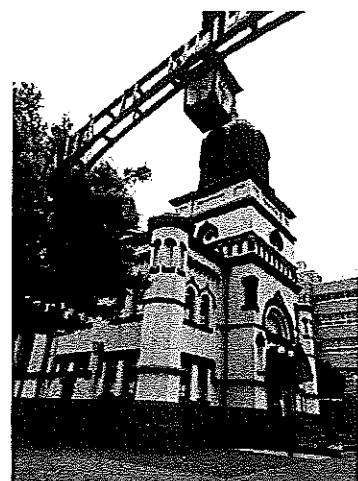


設計者：伊東 豊雄

竣工：1987年3月

コンクリート打ちっぱなしと、正方形と三角形という基本的な形でシンプルにデザインされていましたが、周りの建物よりも目立っていました。側面には、透明な部分と三角形のアルミパネルで覆われている部分があり、実際に見学したのは昼間でしたが夜に見れば中の照明などの光が漏れてビルが一種のイルミネーションのように見えるのではないかと思いました。

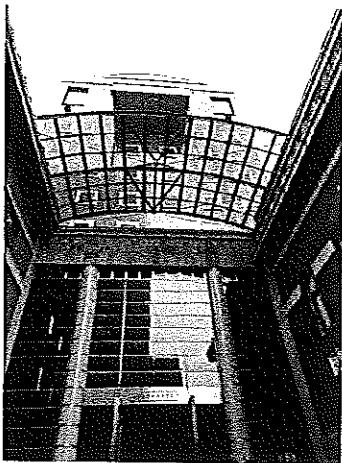
### ニコライ堂



設計者：ミハイル・シチュールポフ  
実施設計者：ジョサイア・コンドル  
竣工：1891年3月

ドーム型の屋根と上部が半円形になっている壁により、教会内の空間がより大きく感じました。シャンデリアが普通のものよりも長く屋根から吊るされているのが珍しいと思いました。また、屋根の外側が青緑色になっているのは塗料かなにかでその様な色になっているのかと思っていましたが、その色は屋根をつくるのに使われている銅が錆びて出てきた色と知り、驚きました。

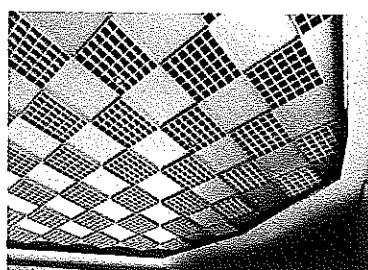
## お茶の水スクエア



設計者：磯崎 新  
竣工：1987年9月

ビルの壁のタイルは、見学したときは青っぽい色に見えましたが、本当はタイルの色は肌色であり、青っぽく見えているのは空の色が反射して見えているだけなのだと知り驚きました。そして、建物の正面にあった扉がとても大きく、何故このような扉をつくろうとしたのかと疑問に思いました。

## 昭和館

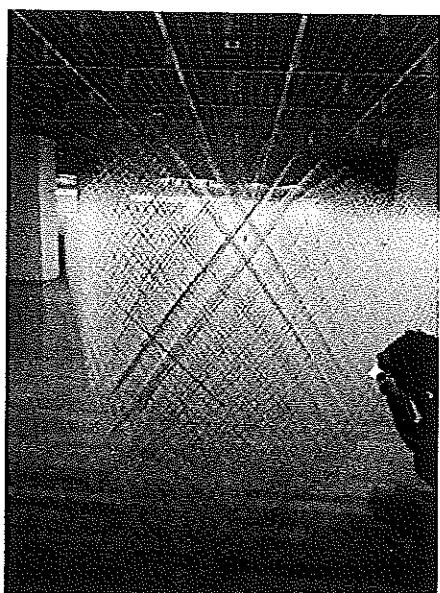


設計者：菊竹 清訓  
竣工：1999年12月

建物は巨大でありながら、意外と丸みを帯びているところや人の足のように見える柱から、その建物の柔らかさを感じました。また、2階の天井の模様が桂離宮の天井の模様に少し似ていると思いました。

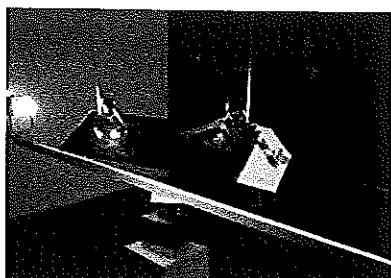
## 東京国立近代美術館(建物はどこにあるの?)

とうもろこし畑 一中山竜治

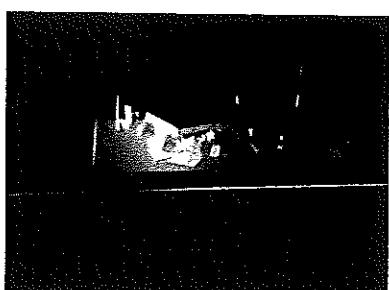
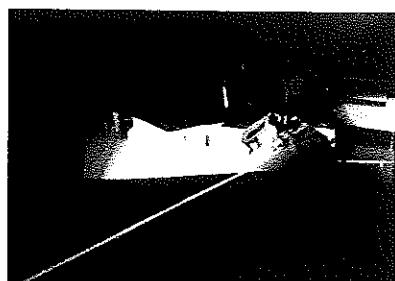


一度で見ただけでは全体を見ることなんか出来ないぐらいに大きく、紙だけでこんなものがつくれるとは思いませんでした。たくさんの線の重なりによって、ある一点と違う一点では構築物の見え方が変わっていて、どんなに見ても飽きないぐらいでした。

## ある部屋の一日 —菊池 宏—



回転する照明を使うことによって、その時の建物に対する太陽の光のあたりかたが表されていました。この模型に起こっている現象が実際に自分の家にも起こっているのだと考えると、不思議な感じがしました。



## 導入ゼミ ウォークラリーレポート

学籍番号 10N1018

氏名 宇多善一

先日のウォークラリーで東京を散策し、東京の印象が変わりました。自分は、東京は高層ビルが立ち並び、自然がなく狭苦しいところだと思っていたのですが、道幅がしっかりと確保してあり、街路樹なども植えてあって、思っていたよりも緑が多くかったと思いました。そして、なによりも皇居には、ほとんど手つかずの自然が残っていて、ちょっとした森のように感じられました。

また、〇日〇月の岡崎さんにいただいた資料で、東京には意外と起伏があることを知り、改めて街を歩くと、有名なブランドの店や大学の立ち並ぶ区域は、やや坂などがあり、道路もやや複雑に感じられ、少し離れたオフィス街では平坦な道にビルが並び、景観はもちろん、雰囲気も違って感じられました。

規則正しくというか、敷地内に四角くビルの建っているオフィス街に比べ、限られた区域に建っている建物は、なんとか空間を広げようと構造に工夫していることを知りました。道に沿って壁が鋭角に交わっていたり、道路との景観を近付けるために壁に模様を彫ったり、屋根のかたちを工夫したりとさまざまな建築物がありました。

ウォークラリーの道程は、御茶ノ水駅に集合してから、まずニコライ聖堂へ行き、次に街を散策しながら、有名な建築家の設計した建物を見て回り、皇居を訪れて、東京国立美術館を見学するといったものでした。最初に行ったニコライ聖堂では、同じキリスト教会でも、東京カテドラル大聖堂とは違った内装というか雰囲気で、お話を聞くと、キリスト教内でも宗派(カトリック、プロテstant、正教会)により、異なるということ教えていただきました。

また東京国立美術館で、『建築はどこにあるの?』を見学し、さまざまな展示物をみて、建築はどこにあるのかを考えてみると、どの建築家の作品も、自分では思いつかないようなデザインで、作品もとても丁寧に作られていて感動しました。自分は、建築とはデザインを思いつくことや、それを実物に起こす技術にあるのではないかと思います。

このウォークラリーで学んだことは、一口に建築と言っても、地域や地形、その他の条件で構造や様式がさまざま、それぞれの建物について、建築家がデザインや工夫をこらしているということです。また、東京はとても広い街で、いろいろな建物があり、しかも自然と共生しているということも学びました。自分が今まで持っていた東京のイメージよりも本当の東京は、建築や都市環境の教科書のような素晴らしい街でした。この体験を活かして、さまざまな建物を見て回り、いろいろな工夫や技術を知り、建築について、もっと興味を持ち、知識を増やすだけでなく、発想力などの感性も磨いていきたいと思います。

## ウォークラリー レポート 10N1019 内海光士郎

今回僕は、ウォークラリーを欠席したため、後日1人でコースを回りました。回った建物の順番は、ニコライ堂、南洋堂、東京国立近代美術館です。

まずは、ニコライ堂についてです。

ニコライ堂に到着すると、まず洋風な印象を受けました。調べてみると、ここは東京復活大聖堂教会と呼ばれる正教会の教会であることが分かりました。建物は、1つの屋根でまとめるのではなく、丸や円柱の形の屋根で構成されているのがおもしろいと感じました。

そして、建物の中を見てみると、最初に、この前見た東京カテドラル聖マリア大聖堂とは内装の感じが違うなという印象を受けました。同じ教会なのにニコライ堂は、カテドラル大聖堂より装飾が多く感じました。これも宗教の方針で少し変わってくるのかなと考えました。

ニコライ堂を見ると特に印象に残るのが、緑青のドーム型の屋根です。この建物の様式は、ビザンティン建築だと言われています。この様式ではドーム型が良く使われています。このドーム型の屋根に何か特別な意味や建築方法があるのか詳しく調べてみたいと思いました。

こういった宗教建築を設計することは、やはり住居を設計したりするのとは、全く別物なのか、または共通する点もあるのか気になりました。

次に南洋堂についてです。

南洋堂は、建築入門の授業で紹介されました。南洋堂は建築の専門店ということなので、また立ち寄ってみたいと思いました。

最後に、東京国立近代博物館に行きました。

ここでは、色々な展覧会が行われていました。特に印象を受けたのは、伊藤豊雄さんの多面体が連続して展開していく作品です。今回は五角形の形が使われていて、五角形は、四角形や三角形より広がりを持って展開していくし、六角形や七角形までいくと複雑になってしまうので、五角形はちょうどいいなと思いました。先日の建築入門の授業でも、新しいリサイクル箱を作る課題で、五角形を利用している人がいて、五角形の形をした箱を必要に応じて連続してつなげていく作品なのですが、やはりこの場合でも五角形が一番適していると感じました。

アトリエ・ワンの作品もおもしろいと思いました。

プロセスを見てみると、待ち合わせの場所に動物園ができたら良いという単純なアイデアから、どんどんとアイデア膨らませていく過程がおもしろいと思いました。

こういった展示品を作るにしても、図面にしたり模型を作ったり色々試していることが分かりました。しかし建築物を作るよりはお金などがかからないので、試行錯誤を色々していて楽しそうだと思いました。

完成した作品は、動物のフォルムがしっかりととしていてすごいなと思いました。竹で

あそこまで綺麗なカーブを作っているのがすごいなと思いました。そして、やっぱり竹は涼しげで夏の感じを楽しめるのが良いなと思いました。

やはり作品は、作っていくまでの過程がおもしろいと感じました。

以上でウォークラリーのレポートを終わります。

## ウォークラリーを終えての感想

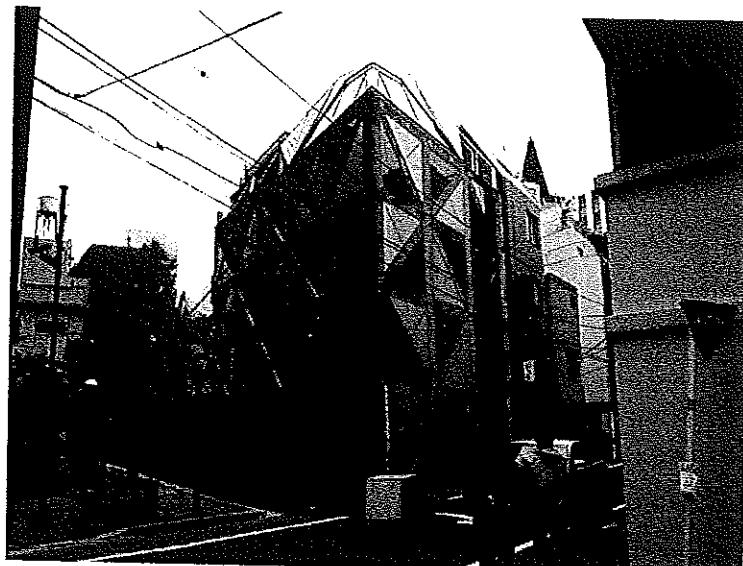
10月10日 梅津 綾

御茶ノ水から徒歩で移動するのだから、「たくさん歩くんだ」と気を張って歩き出したウォークラリーでしたが、思ったよりもあつという間に時間は過ぎてしまつて、疲れたと思う暇もないほど充実した時間でした。

このウォークラリーで、私は日々の生活の中での建築というものに対する見方を、OBの方や先輩方に教えて頂きました。

私は今まで、何か一つの建築に対して向き合うとき、その建築の設計に対するコンセプトというものは注目しても、その建築が今に至る過程というものに目を向けることをしていませんでした。この建築家はどのような哲学を持っていて、その建築はどういう意図で造られたのか。そのようなことを理解しようと努めることは建築を学ぶ上で、重要なことだと思っています。しかし、どんなにその建築家が哲学を持っていようと、素晴らしい意図があろうと、建築は、現実世界のある一定の条件に縛られた場所に建つという事実を忘れては成り立たないのだなと、実際に街歩きをして感じました。

例えば、伊藤豊雄氏設計の神田Mビル。外見として、屋上部分の三角形を多用した連続的な凹凸がとても面白いなど、まず感じましたが、先輩方の説明でさらに興味深く感じました。それは、その直方体を切ったような三角形の連続した屋上が、周囲との外観という理由での高さ制限によって生まれたという事実です。その制限あっての外



▲よく見ると、確かに隣の建物と同じ高さのところから天井面の切り落としが始まっていた

観というところが私にとっては驚きでした。伊藤豊雄氏は今や世界的な建築家で、どんどん新しい構造体を持った建築を生みだしています。そのような人の造った建築なのだから、最初から屋上の凹凸の形というものは何か自分の哲学があって、そこが発生源で出来上がったのだろうと勝手に予想していたのです。それが、その発生源が場所性なのだと分かったときに「これが、先生方がおっしゃる『建築には場所性というのが大切なのだ』ということなのかな」感じ、

少しでもその感覚を味わうことが出来たことに喜びを感じました。

その他には、御茶ノ水スクエアやニコライ堂に使われている材料の話。『御茶ノ水スクエアの壁にはどうして青いのか分かる？それは空の青が映っているからなんだよ。』『ニコライ堂の屋根の青緑はとてもきれいだけど、あれは言ってしまえば銅の鏽だよ。』とその建築に使われている材料のことまでO Bの岡本さんは教えてくださいました。そこに青空があるから青い外観と、銅は加工がしやすいからという機能的な側面から生まれた、ある意味偶然の銅の青緑の美しさ。それはもしかすると、哲学や考え方された設計の末に生まれたものかもしれません、現実のある条件の下で可能な「場所性」を含む美しさなのではないかなと私は感じました。

電車に乗っていると、あっという間に通り過ぎてしまういつもの街並み。その中にも、興味深い建築や風景は溢れていて、私自信が五感を研ぎ澄ましていれば、日々の中で発見することはたくさんあると、このウォークラリーを通して学ぶことが出来ました。これから、大学在学中、そしてその後も身近なことから少しづつ感じ学んで行きたいと思います。

# 導入セミ

10月10日 横 祐斗



## <ニコライ堂 >

- ・ビザンティン様式
- ・教会の平面図は、十字架型でオーソドックスな形である。
- ・十字架のクロスしている部分が祭壇や座席になっている。
- ・柱や模様もキリストの様式により4種類に変化する。



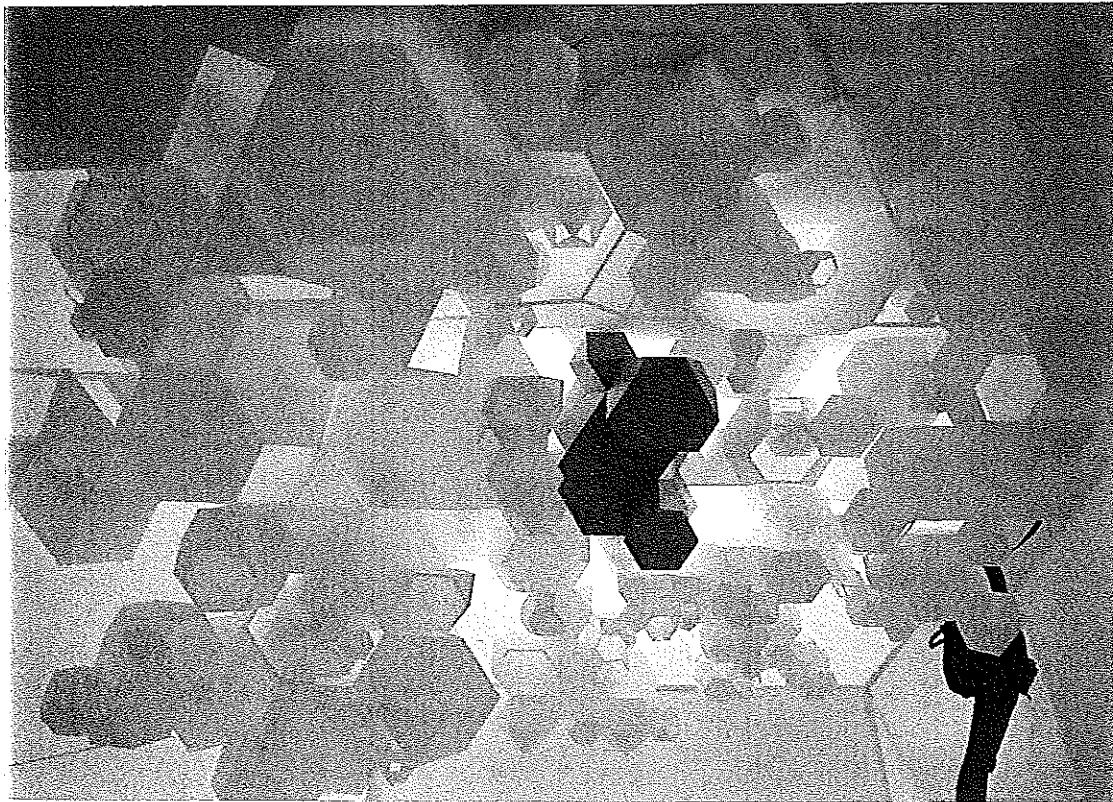
## <南洋堂 >

- ・建築専門の書店。
- ・建物の上にあるステンレス板のようなものが赤いのは、カーテン床の色を反射させ、視覚に入るようにしている。



〈お茶の水スクエア〉

- ・元々建っていた下層部の上に高層棟がのった建物
- ・玄関は4階まで吹抜けになつた内部の天井高にあわせてとても大きな回転式の扉になつてゐる。



〈東京国立近代美術館〉

- ・内部だけでなく屋外にも美術作品が多くあり、そこも刺激的である。